

新権力論

無役時代に日経新聞の昭和四十六年三月九日に前尾批判をこめて発表したもので、「権力について」と加筆改題して、『硯滴』に収録

マキアベリイというと、一般に権謀術数の権化のように理解されておるようだ。たしかにマキアベリイの哲学は権謀術数と深いかわりをもつておるにちがいないが、そのような理解は、機械的であり一面的であるように思われる。

マキアベリイは、人間のいとなみは徳の実現を究極の目的とすべきものであるが、われわれが弱い人間はいわば盲目的な運命に押し流されておるもので、このままでは徳を実現することにはならない。したがって運命の奔流を制御して徳の実現に至る手段と術策を工夫し組織しなければならぬ。そこにいつとここの権謀とか術数とかいうものが考えられることになるというのが、マキアベリイの哲学の骨組みのように私は理解しておる。

権力というものを考える場合にも、権力自体の構造や機能を掘り下げるだけではなく、それを必要とするより高

次のものを予定しておるものだという消息を心得てかかる必要があるように思われる。権力というものが、それ自体孤立してあるものではなく、権力が奉仕する何かの目的がなければならぬはずだ。権力はそれが奉仕する目的に必要な限りその存在が許されるものであり、その目的に必要な限度において許されるものだといつことだ。

このようにいってくると、問題は至極簡単なようであるが、むずかしいのは何が目的かということである。マキアベリイ流にいうと何が徳の実現になるかということである。今日の日本の状況において、「平和」とか「福祉」とかいうと、何人にも異存のない高次の目的たり得るものである。「富強」とか「快適」とかになってくると、必ずしも説得力をもつた目的にはなりかねない。ところが、一応万人に異存のなさそうな「平和」とか「福祉」とかいっても、その内容は必ずしも明確ではなく、人によってその理解するところが多様に分化して帰一するところが見付けにくい。

たとえば平和ということとは、戦争のない状態ということであれば今日すでに実現されておることである。それだけではだれも満足しない。国の内外を通ずる積極的な秩序にささえられた、もっと具体的内容をもつた平和でなければな

らない。そこまでくると、問題はイデオロギーの領域にはいつてくる。また福祉といつても、単にGNPだけで計算できるものではなく、もっと積極的にわれわれに生きがいをもたらすようなものでなければならぬ。

もっとも現実の権力は、その当否はともかくとしても、それなりにこういう高次の目的に対して、ある種の考え方を予定し、そういう状況をまもる限りにおいて、自らの権力の存在理由があると考へておるにちがいない。どんなにお粗末でも権力のための権力を考へておる権力はいない。その場合でも、権力の主体は往々にして「安定」というような高次の目的に藉口することを忘れてはいない。

もともとイデオロギーとなると、果てしなく分化し帰一するところはない。それを一つにしぼることは全体主義国家でも、人間の改造のない限り、できる相談ではない。しかし、世の中にはイデオロギーにはあまり関心のない、ないしは関心のうすい層があるものである。しかもそれは相当広範に存在するものである。権力が考へなければならぬのは、自らのイデオロギーに同調と理解を求めることよりは、こういう無関心な厚い層をいかに自らの存在に有益なもの、ないしは少なくとも無害なものにする工夫を通じて、自らの基礎をかためることではあるまいか。

それにしてもそのことは決して容易な仕事ではない。圧制や懐柔でできることにも自ずから限界がある。一時を糊塗することができても長く信頼をかちとることは至難である。そこに術策とか手段、つまりマキアベリーのいうネセシタのもつ限界というものがある。権力にはもっと深い根元的なものがなければならぬ。

東洋においては為政の根本を手段に求めずに権力の主体の人格に求めてきた。制度や法の精緻な網に期待するよりも、主体側の徳望に求めてきた。まず己を知り、己に克ち、己を尽くすことが為政の根本であるとされてきた。その消息は、何も東洋の専売特許ではない。西洋の政治思想にもうかがわれるものである。

元来、権力というものが人の意識に上らない状態こそが政治の理想とされてきた。そうだとすれば改めて権力論が問われるようなことはあまり歓迎すべきことではない。しかし世界史の運命がけわしくなると、か弱い寄る辺なき人間がその奔流に押し流されることを黙視するわけには行くまい。権力は全身全霊の力をこめてその奔流を制御し、人間を守らなければならない。そのためにはあらゆる術策を用意しなければならないのは已むを得ないことである。

しかし権力の本体は、そういう術策にあるのではなく、権力者自体の自らの在り方にあるのだということだけは銘記すべきであろう。術策の分量やその組み合わせの巧拙よりも、権力主体のあつめる信望の大きさが、その権力に本当の信頼と威厳をもたらすものである。アンドレ・モーロアは「他人を支配する秘訣は、自らを支配することを体得することにある」と言っておるが、権力の主体に対する頂門の一針といふべきものであろう。